

中学部の実践



目 次

I	基本的な考え方	49
II	実践1 「夏の宿泊学習」の指導を通して	52
III	「修学旅行」の実践を通して	58
IV	まとめ	70

意欲的に学習させる条件づくりと 場の構成はどうあればよいか

I 基本的な考え方

1 中学部教育のねらい

本校の教育目標は「個々の能力を最大限に伸ばし、人間性豊かで家庭生活や社会生活に自立できる児童・生徒を育てる」ことである。これをうけて、中学部では「集団生活に必要な基本的生活習慣や日常生活に必要な言葉や数量等についての初歩的な知識を十分身につけさせるとともに、健康でたくましい身体を養い、社会生活によりよく適応できる能力を育成する」ことをねらいとし、集団生活を通して社会性を育てることや、幅広い経験をさせて自主性を伸長すること等を努力点としている。そして、このねらいを達成するために自発的活動や集団活動等を重視し、生活力の育成をねらいとした生活単元学習と生徒が、将来職業人と成り得る為に必要な態度、習慣を主に指導しながら、基礎的な技能や作業に必要な知識を習得させようとする作業学習を中核として教育課程を編成している。

2 昨年度の研究の視点と経過

「動き」を外的、内的な人間の活動における基本的な行動をすべて包含し、集団生活・社会生活において周囲の人々との相互関係を保てる行動ととらえ、自主的に行動する生徒の育成をめざし、「生徒どうしの人間のかかわり合いを深める指導のあり方」をテーマとして、製作や表現等の場面を重視しながら、集団による成就感、満足感を味わわせる指導を展開してきた。その結果、友達の様子を見たり、友達の動きにつれて動いたりする活動から、友達の援助をうけて一緒に活動したり、役割を分担したりして、どうにか共同的な活動が出来るようになったと思われる。しかしながら生徒一人ひとりが意欲をもって活動するまでには至らなかったようである。

3 生徒の実態

中学部の生徒は1年生6名(男子5名、女子1名)、2年生6名(男子3名、女子3名)、3年生女子2名、合計14名(男子8名、女子6名)である。

ほとんどの生徒は、教師の指示がないと行動できないし、課題意識が高まらず、それが具体的な活動に結びつかないで、すぐに注意がそれて、全く関係のない事からに興味が移ってしまうなどの行動が目立ち、意欲的に学習できなかった。また、言語が不十分で自分の気持ちを表わせない、依存心が強く人まかせになる、内気な性格で友達に援助できない。集団参加はできても消極的で、しかも自己中心の行動が多かったので共同での活動が高まらなかった。

4 本年度の研究の視点

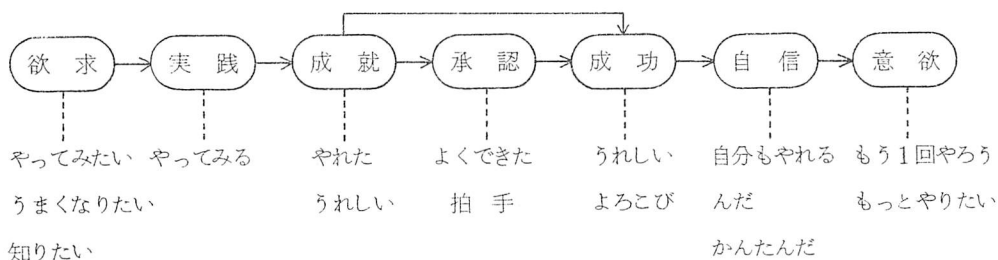
上記のような実態から、一人ひとりの生徒の集団参加能力と共同で活動する力を高め、意欲的に学習させることの必要性を痛感した。また、昨年の研究を通して、一人では自発的に行動出来ない生徒が、共同学習では模倣活動を含め、自発的活動が促進され、学習に意欲的に取り

組むことや、単元での活動の高まりの背景には、友達と一緒に活動したり、友達や教師に自分の活動を承認してもらったり、援助してもらったりすることによって、意欲的に学習するものがあるということがわかった。

今年は「動き」をより生き生きと活動することをめざして、生活体（自分）と外界とのかわりを向上させることであるととらえ、集団活動を通して人間関係の改善、深まり、拡大がみられ、より生き生きと活動するであろうという考えに立って、「意欲的に学習させるための条件づくりと場の構成」を研究の視点とした。

5 意欲の考え方

広辞苑には、意欲のことを「積極的に何かをしようと思う気持ち」と記してある。わたしたちが考えている意欲とは、何かをしようという目的をもち、その目的達成のために積極的に学習しようと思う気持ちであり、その意欲が起こるまでの過程を次のように考えている。



意欲は、生徒の心情、もしくは欲望に属するものであり、意欲が起こるのは次のようなときと考えられる。

- ① 認めてもらったうれしさを体験したがゆえにもう1回繰り返そうとするとき。
- ② 「できた」「うれしい」という成就感・満足感を味わい、もっとやろうという気持ちになったとき。
- ③ 「がんばれよ」「がんばろうね」「もうちょっとだよ」「いいいいいよ」など、励ましや慰め合う仲間の共感があったとき。
- ④ 負けた悔しさを体験し、「負けるものか」と思うとき。

生徒が意欲的に取り組むためには「自分もできそうだ」「やってみたい」「できるようになりたい」という欲求に即応して単元を組織したり、身体や道具を使って対象者へ直接かわるような実際の活動を豊富にとり入れたり、一人ひとりに課題を持たせたりすることはもちろん、集団としての取り組みをさせたり、一人ひとりに役割を持たせたり、やすらぎのある人間関係をつくったりすることも極めて重要なことであると考えます。

6 集団の考え方

人間は社会的存在であるといわれるように真に人間としてその発達を獲得していくためには、他との交わり、つまり集団の場が必要ではなかろうか。そこで、集団の有効性としては、

- ① 友達や教師の模倣ができる。

- ② 「３人寄れば文珠の知恵」といわれるように、計画が立てやすくなる。
- ③ 自分と発達レベルが同程度の者がいると、やってみようという気持ちになる。
- ④ 友達や教師に援助してもらい、自分もできたという成就感、満足感が得られる。
- ⑤ 一人ではやれないことが集団ではできる。
- ⑥ 共通の目標に向かって、役割を分担して活動ができる。
- ⑦ 集団の中で自分の行動をふりかえることができる。
- ⑧ 励まし、賞賛する仲間や教師がいる。
- ⑨ ぶつかり合いや競争の場が作れる。
- ⑩ リーダーが仲間を手助けすることができる。

ことなどが考えられる。その反面、過保護になりやすい、遅れている生徒からのほたらきかけなどの問題点もあるようだ。

7 「意欲的に学習させるための条件づくりや場の構成」の具体的取り組み

(1) 生徒どうし、生徒と教師の暖かい人間関係

失敗しても笑われたり、とがめられたりしないような場であれば生徒は心理的に安定し、自由に安心して自己表現ができるものと思う。認めてもらったうれしさを体験したために、もう一度繰り返そうとするような体験や喜び合ったり、慰め合ったりする仲間の共感が得られるような雰囲気や環境をつくるように心がけている。

(2) 班編成

いろいろな集団（学級、学部、学校、学年別、男女別）で活動させることが社会性を高めるのではないかと考えて、集団を組織しているが、今年は学級集団での活動を中心として学習をすすめている。また、２～３人で活動する小集団の形態を班活動と位置づけて実践してみた。一学期の実践例を集団活動、二学期の実践例を班活動ととらえている。班編成にあたっては、相性のよい組み合わせを基本にしながら、誰とでも一緒に楽しく活動できるようにすることが重要なことであると考えられる。

(3) 役割分担

一人ひとりに応じた活動をさせ、その活動が集団の中で承認されるような手だてをしてやり、成就感、満足感を味わわせ、意欲へと発展させるようにしている。また、役割を分担することによって活動量が増し、人と人のかかわりも深まっていくものとする。

8 単元構成と指導の姿勢

生徒の興味や関心に基づき、それを喚起し、強化するものや集団で共同的に取り組み、人とかかわりをもって活動できるものを取りあげた。また指導にあたっては、計画する段階から生徒の自発的・主体的な活動を重視して、できる限り生徒と教師が共に活動する姿勢で臨み、経験を重ねることによって、やがて生徒たちだけで成就させるように努めている。

Ⅱ 実践 1 「夏の宿泊学習」の指導を通して

1 単元 夏の宿泊学習

2 単元について

現代っ子は生活力が希薄であると問題になって久しい。精神発達遅滞児においてはなおさらこの点は著しく、彼らが今日の社会生活を営んでいくために、生きがいや充足感をあらゆる角度から追求していくことはきわめて重要である。障害をもっているため社会の理解が十分でなく、親は過保護になりやすい。そのことは生活力の育成を拒む大きな原因とも考えられる。

親元を離れて生活する経験がほとんどない彼らに、宿泊を通して、寝起き・洗面・食事等身辺のことをできるだけひとりでやっていかななくてはならない状況を作り出し、依頼心・甘え等精神的な面で、自立を促す場を設定し、自主的自立的な生活態度を育てていくことは、きわめて重要なことと考える。

そこで、本単元では校内宿泊において、自分たちの食事は自分たちで作れることをめざし、キャンプ学習では、学校では味わえない自然環境の中で生活していくための集団参加の能力を育て、テントを張っていっしょに生活する経験を豊かにさせる二つの学習を中心に展開し、協調性や自主性を高め、情緒の安定を図り、経験を拡大させていこうとしているのである。

自分たちで料理を作ったりテントを張ったりする学習は、「食べる」「寝る」の欲求を満足させてくれるため、生徒の関心は高く意欲的に行動してくれることと思われる。しかしながら、切る、結ぶ、打つ、くくる、引っ張る等の諸技能が著しく違う実態を考慮し、綿密な計画のもとに系統的、組織的に指導していきながら技能を高めていくことが大切である。そのためには、学習課程の中で練習を多く取り入れ、自分たちの力でできる喜びを味わわせ、自信をもたせたいと考えるのである。

また、校内・校外宿泊学習を楽しくさせるために、レクレーションや班活動も大事な学習活動であり、これらの活動をさせながら、役割分担を意識させ、自己表現させることは責任感、表現力の醸成に意義深いと考える。

以上のようなことから、校内学習における経験と修得した技能が、実際場面で生かされるよう指導し、特に、調理とテント張りの練習を中心に学習させることは、集団参加の能力の向上、対人関係、協調性、積極性の育成が図られ、心身の自立をめざす活動に適していると考えられる。

3 目 標

- (1) 校内宿泊やキャンプを実際にさせることを通して、日常生活の基本的な態度や望ましい人間関係の育成と向上を図り、楽しく協力して生活ができるようにさせる。
- (2) 調理やテント張りを通して、それに必要な基礎的技能を高め、生活に役立てる知識を育てる。
- (3) 宿泊学習を通して、積極的に仲よく活動しながら、集団の一員としてのきまりを守り、役

割を果たさすようにさせる。

4 指導計画（総時数 74 時間）

学 習 活 動 ・ 内 容	時数	学 習 活 動 ・ 内 容	時数
1 昨年の宿泊学習を思い出す。 2 ことしの宿泊学習の計画を立てる。	11	6・テント張りの練習をする。 ・テントの広げ方や順序 ・くいやひもの数について ◎テントの張り方 （くりかえし学習をする） ・テントのしまい方	12
3 班活動をする。 ・班編成 ・班名決定 ・役割分担 決め ・レクリエーションの話し合 いと練習 ・買い物 ◎炊飯練習	16		
4 校内宿泊学習をする（実態）	9	7 出発の用意をする ・自分の持っていく物の点検 ・学校から持っていく物 ・料理用の材料 ・荷造り	6
5 レクリエーションの練習や校外宿 泊学習の準備をする。 ・夜のつどいの話し合い ・キャンプファイヤーの方法と練習 他	5	8 校外宿泊学習（キャンプ）をする	11
		9 荷物のあとかたづけや反省をする	4



5 単元の展開例

(1) 指導にあたって

6～7月にかけて展開された「夏の宿泊学習」は生徒たちに様々な経験を与えた。また集団による共同的な体験学習は個の意識や行動の高揚を図る上で必須のものであるという考えに立って場の改善を試行している私達にとっても、その結果はひとつの大きな足がかりとなった。私達は経験の拡大というねらいのもとに、繰り返しの練習を組み、集団での成就感、満足感を味わわせながら個の意欲化を図ることに力点を置いて指導してきた。

調理実習、レクリエーション等それぞれに役割分担を決め、生徒間のかかわりを深めた学習活動の中で、ここでは一人ひとりの生徒に集団参加を余儀なくさせる場を意図的に構成したテント張りの学習について活動を追って述べてみる。指導にあたっては特に次のようなことに留意した。

- テントの必要性に気づかせ、一人ひとりが実態に即した作業分担をする中で、繰り返し練習することによって、やがてみんなで協力し、助け合いながら、できるだけ自分たちの力でテントを完成させることができるようにする。
- 個々の生徒の特性を生かし、技能を高めていくと同時に、生徒どうしがかかわりあって作業していく場面をたえず設定していく。
- 体で感じ、体で覚えていく学習活動の展開を工夫し、意識化を図りながらそれぞれの自発性をひき出していく。

(2) テント張りの活動と指導経過

① 「あ、テントだ。」

テント張りの練習初日、登校と同時に生徒たちのほとんどは各クラスの前に張られたカラフルな三つのテントに気づき歓声をあげる。予期せぬできごとで驚きと喜びの表情が多い。活動的な生徒はまわりを興味深げに見てまわったり、中にはいりこんだりしている。教師にいろいろ尋ねる生徒もいる。おとなしい生徒にも新奇なものに対する驚きの様子が伺われる。突然の提示で、生徒たちのテントに対する印象、関心、興味も強くよびおこされたように思えた。

② 「テントの中は楽しいなあ」

「さあみんな、テントの中にはいってみよう」のかけ声に、生徒たちは好奇の眼で中をのぞきこむようにしてはいっていく。クラス別にそれぞれのテントにはいり大はしゃぎする。寝ころぶ、輪になってすわりゲームをする、歌をうたうなど楽しくひとときを過ごす。校内にできた小さな新しいスペースが生徒たちの心を刺激している。入口を閉め、「これで雨風にも大丈夫、テントはいいなあ」と共に喜ぶ。キャンプの時最も必要なもののひとつであるテントの役割についても気づかせる。

③ 「自分たちでテントを張ってみたい」

キャンプでは実際に自分たちでテントを張ること、みんなで力を合わせて組み立てるこ

とを意識させる。活発な生徒は既に意欲満々である。「テントを張ってみたーい」とはりあげた一生徒の声に一同の眼が輝き、同じことばが後を追う。

④ 「テントはどんな組み立てになっているんだろう？」



テントがどんな部分からできているか教師と共に観察する。反応の乏しい生徒には手を取ってたえずことばで呼びかけながら意識化を図る。クイやひも、支柱やフライ（やね）等気づかせたあと、どの部分を取ればテントが崩れるかを予想させる。生徒の予想した部分を二つのテントを使い、可能な所は生徒たちに取りはずさせてみる。フライを取りはずしたテント、クイやひもを取ったテントは

大きく形が崩れたものの完全には倒れない。次の段階で一部の生徒が、支柱2本でテントが立っていることに気づく。支柱を倒すとテントが完全に倒れることを実際に確認させる。きれいに張られたテント、形の崩れたテント、完全に倒れてしまったテント、それらの三つのテントが対比的に印象強く生徒の眼に写ったにちがいない。

⑤ 「先生と一緒にテントを張ってみよう」

教師と一部の生徒で倒れたテントを再び張りなおす。他の生徒たちが見学する中で仕事を進めながら、用具の役割、使い方、テント張りの手順をおさえる。技能的に高い生徒の参加であるが見通しがもてないため作業はぎこちない。見学をする生徒たちの中にも直接的な刺激がないため、注意散漫な状態になっている者も多い。

⑥ 「クラスごとにみんなでテントを張ってみよう」

張られたテントをそれぞれのクラスで崩していきながら、用具の確認と、それがどんな所に使われているかを気づかせていく。教師も手助けしながらたえずことばをかけ、どの生徒も活動に参加させ意識化を図る。組み立て作業は、生徒どうしが力を合わせないと困難であることに気づかせ、リーダー格の生徒に級友を動かしていくよう何回となく指示する。シートを広げる、支柱を支える等、数人の生徒が協力しあわなければテントは張れないことを体験を通して気づかせる。どの生徒も遂時教師の指示や手助けを受けての活動である。

⑦ 「テントができた！」

手助けや指示を受けながらも、自分たちの体を動かしてテントを張りあげた成就感には大きなものがあつたように思えた。たたえてやると同時に、ひもがピンと張られていないためテントの中がたるんでいることや、支柱の傾き、クイの方向等、技能的な面についての指導も加える。練習を重ね、やがて自分たちの力でテントを張れるようになることを目標にさせる。一人ひとりに合った作業内容や生徒間のかかわらせ方について検討を加える。

⑧ 「がんばるぞ」



テントを張る、たたむという過程を、それぞれの生徒に役割分担を明確にしていきながら繰り返し取り組ませていく。回を重ねるごとに教師の助言、手助けは少なくなっていくそれに代わるものとして生徒間のかかわりが深まっていく。はじめの段階で棒立ちの状態であった自閉的傾向のある生徒にもひもを締める動きが見られるようになる。パターン化された過程の中で徐々に自分の役割についての意識も芽ばえ、動作化されていく。生

徒たちにさせる作業内容と教師が助言、手助けをしてやる作業内容が明確になっていく。テント張りにおいてクイを打つ位置は重要なポイントとなるが、判断が困難であるため自作のT定規を使わせていく。用具や手順について確認させる指導は継続して行う。

⑨ 「自分たちの力でテントが張れたぞ、！」

技能も高まり、それぞれの生徒がいくらか自発的な動きをみせながら作業に参加する。これまで練習した経験を生かし、各自が話し合いで決めた作業分担を中心に手助けをし合いながらひとつのテントを張り終える。作業への参加態度や個々の生徒間のかかわりあいについてはまだ助言を必要としたが、初めての段階と比較すると生徒の動きが全く違う。全員がテント張りという共通の目標に向かって、かかわりあいながら何らかの責任を果たしている。バラバラだった意識と活動が、テント張りという共同作業を通して、その完成に向かい、1本化されたルールの上を一体となって歩んでいるように思えた。生徒たちはテントの完成と同時に、“みんなで力を合わせて自分たちでテントを張ったんだ”という成就感、満足感に満ちていた。再びテントの中で歌や大きな歓声があがる。ひときわ弾んだ声で。

⑩ 「次はキャンプ地にテントを張るんだ、！」

＜中学部3組におけるテント張りの役割＞

生徒名	床地 整地	床つ くり	床ピンと め・配り	リッチ 入 れ	フライ つ け	ポール た て	くい場 所さめ	くい 配り	くい うち	ひも つけ	ひも しめ	しあ げ
A・S	○	○			○	○				○	○	○
S・A	○	○	○		○		○		○			○
K・T	○	○		○	○	○	○		○			○
M・N	○	○	○		○	○		○				○
I・K	○	○			○	○				○	○	○

6 単元を終えて

生徒たちは毎日様々なかかわりあいをもって生活している。そのなかかわりの中で周囲を意識し、相互に何らかの影響を及ぼしている。そこで私達は集団の効力に着目し、一人ひとりの生徒をより生き生きと活動させることをめざして、場の構成を工夫しながら指導を進めてきた。

テント張りの学習を通して、学習意欲を喚起するための導入の工夫、一人ひとりの生徒が何らかの形で集団にかかわりをもたざるをえないような場の設定、個や集団に成就感、満足感を与えるような展開の工夫等を検討した結果、それぞれの生徒に内的動機から行動化への変容を見ることができ、今後の可能性についても多くの事を学ぶことができた。消極的なものから積極的なものへの変化、依存や模倣の段階から自分なりの判断をもち外界にはたらきかけていく段階への移行等がその姿としてとらえられた。また共同活動を通して個々の生徒間の人間関係も深まり、「みんなでテントがはれたんだ」という成功感も味わわすことができたように思える。活動の中で、技能的な面や役割遂行にあたっていくつかの衝突場面が生じたが、そのことで様々な疑問や障害にぶつかりながら仲間どうしの考えや自分なりの判断がからまり、より高い意識への変容にもつながることができたようにも思える。以下、消極的なものから積極的なものへ高める手だてとして、特に重要と感じたことをいくつかあげて述べてみる。

① 直観的経験を介して内発的衝動を起こす

意欲を喚起する条件として、生徒たちの心に驚きや喜び、楽しさ等内発的な衝動を起こすような場面をいくつか作った。カラフルな三つのテントの突然の出現に対し、自閉的な傾向の生徒にも外界の変化に対する表情や行動の変化が観察され効果的であった。また、テントの組み立てを確認させる作業を導入することによって興味をひきおこすことができた。さらにテントの中で楽しく過ごさせたり、体や道具を使って対象物へ直接かかわる活動を多くさせたりすることで、内発的衝動を強く起こさせたように思う。

② 繰り返しの学習によって意識化を図る

生徒の実態は様々であり、個の意欲化を図るときに、特に反応の少ない生徒への意識づけ、関係づけの指導法のあり方が一考された。低い生徒の意識化を図るためには動作化を導入していかなければならないことを強く感じた。ひもつけの役をした生徒は、はじめ全く手を動かそうとしなかったが、幾度となく教師が手を取り練習させた結果、最後には自分で締めたあと拍手をして喜ぶようになった。ある目的動作が成立するまでの繰り返しの学習、それによって獲得された動作の高まりが、意識をもひきあげていくという見方もできた。

③ 人とかかわりを促進し、成就感、満足感を味わわせる

テント張りは、床づくりやポール立てなど一人ではできない作業内容がほとんどであり、各場面において生徒たちは自分の役割を進めながら友達の手助けを必要としたり、援助されたりする状況におかれた。一緒に力を合わせて作業する場面や、生徒間のかかわらせ方を改善していったことで仲間の様子を気づかう姿が多くなり、協力し、助け合う動きが高まっていった。

Ⅲ 実践 2 「修学旅行」の実践授業を通して

- 1 単元 修学旅行
- 2 期日 昭和57年11月17日
- 3 場所 中学部教室
- 4 対象 中学部 2年6名 3年2名 計8名
- 5 単元について

- (1) 中学部の生徒は、かかわる世界を広げ、社会に目をむけ経験を拡大することが大切な時期つまり、啓発的経験の時期にある。このような時期にある生徒たちが、集団で行動し、交通機関を利用することによって見知らぬ土地に旅行し、自然や風物を見学したり、公共施設を利用したりすることはきわめて重要な経験である。これらのことは彼らが成長するにつれ、今後経験していくことが多いと思われる。また、集団行動を通して、自律心を育て、集団生活について体験を深めることは、社会生活に適応していくための大切な要因と考える。

本校中学部の生徒は、指示や注意をすればそれに従って行動することはできるが、集合や整列など遅く、自ら進んで行動したり、他人への援助をさしのべたりすることは不十分である。

生徒たちは、これまでキャンプ・合同宿泊学習・遠足・学部のいろいろな校外学習等で、教え合い・助け合いながら、集団で行動することや学習することを多く経験してきた。そのことで、当初に比べると協調心もめばえ、協力することのよさ、大切さも育成されつつあると思われる。そこで、本単元においては、過去の経験を生かしながら、修学旅行に関する事前・事後の学習で、協力し、助け合いながら活動することを通して、コースや日程、見学地名、役割等を理解させるとともに、集団行動のし方や公共機関の利用のし方、見学のし方等社会生活に必要な態度を育て、意欲的に行動できることをねらっている。

修学旅行は実際生活そのものである。日程にそって行動していくことは、社会生活上極めて重要で協調性が要求される。そのため、資料をもとに計画の話し合いや製作活動、反省の学習にみんなで協力し、助け合っていく活動を多くとり入れ、情緒の安定を図るとともに、成就感、満足感を与え、生徒たちが自信と意欲をもって行動できるように育成したいのである。また、実際に交通機関の利用やホテルでの生活、観光地における見学等において多くの人と接する機会も多いと思われる。そのことは、実社会の中で行動できる喜びを味わわせ、社会参加の一員であることの自覚を促す格好の場であると考ええる。

- (2) 修学旅行に参加する生徒8名は、小学部（小学校）6年生の時に1泊2日の修学旅行を経験しており、校内宿泊学習をはじめ夏の宿泊学習、秋の合同宿泊学習において家族を離れての宿泊や集団生活の経験もしてきている。こういう経験の積みかさねによって身辺処理のし方や集団行動における態度等に変容が見られるようになった。今度の旅行先はほとんどの生徒にとって見知らない土地であり、2泊3日の期間にわたるので環境や生活の変化による身辺処理のし

方が懸念される生徒もいる。集団行動面では、指示によく従うが積極性にかける生徒が多い。友達とのかかわりあいをもとうとする気持ちはどの生徒も強いようであるが、対人関係のまづさからそれが十分生かされないことがある。

生徒1人ひとりのおおよその実態は次の表のようになる。(IQ……田中ビネー)

氏 名	IQ MA	身辺処理	集団行動	旅行の経験	人とのかかわり	備 考
M ・ Hiro	4 1 4 :10	衣服の着脱や排泄処理はほぼ完全にできる。食事のし方は少し幼稚な面がある	指示等の理解力はあるが動作がおそい。役割や分担の仕事は指示されるとよく果たす。	県外への旅行の経験はない。特急や急行列車に乗ったことがない。	気分にもうが見られる。学習の積み重ねにより班長としての意識が高まってきた。	地名に関心が高い。注意散漫
M ・ Hisa	6 3 8:0	衣服の着脱や排泄の処理はよくできる。入浴のし方もすべて自分でやれる。	場面や状況によって意志の伝達にむらが見られる。動作は緩慢であるがしっかりできる。	北九州方面まで行ったことがある。徳之島までの船旅の経験がある。	友達のめんどろをよくみる。内向的であるが積極的にリードしていく面もみられる。	著しい環境内の変化による場面緘黙がみられる。
K ・ T	7 3 8:4	寒暖にたいする衣服の調節ができないときがある。身辺処理全般においてよくできる。	指示等の理解力は高く指示されると役割や分担の仕事もよく果たす。	姫路、北九州まで特急列車で行ったことがある。	友達の注意をすなおに聞き入れ行動にうつす。友達のせわをすることもよくある。	場にそぐわない発言をすることがある。
S ・ C	3 1 4:1	動作はおそいが衣服の着脱は完全にできる。食事のとき口いっぱい入れるくせがある。	集合や整列はのろいが指示等の理解力はあるよく従う。意志の伝達がやや困難である。	沖縄へ6回船と飛行機で旅行をさしている。急行で別府まで行ったことがある。	気に入らないときは自分本位になりやすい。ふつうは友達の注意もきき協調性もある。	歌やリズムを好み身体表現がうまい。
Z ・ R	3 1 3:9	時おり機を失い小便をもらすことがある。食事はあまりそしゃくしないで食べる。	言語不明瞭で意志の伝達がやや困難である。指示等の理解力はある動作も積極的である。	熊本まで特急で行ったことがある。	誰とでも積極的なかわりをもとうとする。それが友達にうさがられたりする。	喜びをすなおに表現する。

氏 名	IQ MA	身辺処理	集団行動	旅行の経験	人とかかわり	備 考
H ・ R	3 3 3:10	身辺処理全般においてよくできる。 食事がおそい。	指示がわかれば機敏に行動できる。 意志の伝達が困難である。 発音不明瞭である。	家族で今年の修学旅行コースを旅行している。	誰とでも仲よくする。友達の注意もすなおに聞き入れて行動にうつす。	几帳面でこつこつとがんばる。
M ・ N	2 6 3:0	衣服の着脱がのろく十分にできないときもある。小便の機を失いもちらすこともある。	自分本位に行動することがある。集合や整列の動作がのろい。指示の理解力はある。	家族で東京をはじめあちこち旅行の経験がある。飛行機や特急列車に乗ったことがある。	友達とかかわりあいをもとうとするがうるさがられることがある。	なにごともしたがりが長つづきしない。
I ・ K	3 3 4:0	身辺処理全般においてよくできる。衣服の着脱で後えりの整えかたができないときもある。	動作は緩慢であるがよくできる。 意志の伝達ははっきりしている。	東京方面まで飛行機で旅行している。	自分本位な面もあるがみんなを積極的にリードしていくこともある。	集中力不足。歌がうまい。 感情表現が豊かである。

(3) 指導上の留意点

以上のようなことから、この单元では次のようなことに留意して指導にあたりたい。

- 小学校（部）時代の修学旅行の記録（スライド・8ミリ・写真）や親への事前アンケートの資料等をもとにして、これまでの修学旅行に関する経験を想起させ意欲を喚起させたい。
- 修学旅行のコースや日程に関する資料に漫画風のさし絵を多くとり入れ、親近感を味わわせ理解を深めたい。
- 事前に撮影（9月）してきた旅行地のスライドを視聴させ、「はやく行きたい」という気持ちを高めたい。
- 旅行地のパンフレット等を切り抜く作業をさせながら、自分たちで“しおり”を作成する経験をさせ、あわせて旅行地を理解させたい。
- 学習資料（地図・自作コース図・日程表・その他）を廊下に常時展示し、友だちとの語りを通して興味、関心をさらに高めたい。
- 大分大学附属養護学校との交歓会の資料交換も事前に実施し、意義ある交流学习になるよう努めたい。
- 生徒たちの意見を十分尊重した班をつくり、集合や整列などの行動が迅速におこなわれる

ように配慮してゆきたい。

- 団長やあいさつ係，食事係等，みんなに役割をもたせ，修学旅行へ意欲的に参加できるように配慮したい。
- 集団で行動のし方に関する内容も計画的に指導し，実際の行動がスムーズに行われるようにしたい。
- ホテルでの態度，見学地や車の中でのマナーに関する指導も重視し，学習内容として取り扱い指導を深めたい。
- 時刻や旅行地の漢字，地図の見方など教科に関する内容は，つとめて毎時間取り扱っていくよう配慮したい。
- 作業学習や美術とも関連づけ，交歓会で使う作品づくりも実施していきたい。
- 旅行後の反省のし方については，単に話だけで旅行のことを思い出させるのではなく，一年生や父母への報告会というめあてのはっきりした場面を通して思い出させるようにしたい。その際，報告会のための資料づくりにあたっては，作業を多く取り入れ，役割を分担させ，協力して作成させたい。
- 絵や作文，手紙などにまとめたり，スライドや写真・８ミリ等を見たりして，修学旅行をやり終えた満足感を味わわせ，今後の学校生活への意欲をもたせたい。

6 指導目標

- (1) 話し合いや報告活動を通して，旅行への意欲を高めるとともに協調性を育てる。
- (2) 交通機関の利用や見学などにおける望ましい行動のし方を身につけさせる。
- (3) 報告会への取り組みを通して，成就感，満足感を味わわせ旅行の印象を深める。

7 指導計画（総時数３０時間）

過 程		おもな学習活動・内容	時 間
計 画 次	第 一 次	1. 修学旅行について話しあう。 ○ 小学校での修学旅行 ① ○ 今年の計画 ①	10
		2. 目的地の様子や日程，交通経路について調べる。 ○ 見学場所しらべ，コース図づくり ② ○ 日程表づくり ②	
		3. 集団行動や車中，旅館での過ごし方について話しあう。 ○ 役割，係分担，班編成 ②	

		<ul style="list-style-type: none"> 車中，旅館でのマナー ② 	
準備	第二次	4. 旅行の準備や練習をする。 <ul style="list-style-type: none"> しおりづくり ⑤ 交歓会の準備と練習 ⑤ <ul style="list-style-type: none"> 寄せ書きづくり モザイク作品 レクリエーション 持ち物の点検 ② 	12
実	際	5. 修学旅行に参加する。	(17)
反省	第三次	6. 修学旅行の思い出を話しあい，報告会をする。 <ul style="list-style-type: none"> 報告会の計画 ① 報告会の準備（写真整理等） ② 資料づくり ② 報告会の練習 ① 報告会 ② 	8 (本時2/8)

8 本 時

(1) 目 標

- 修学旅行の報告会へ向けて，自分の報告するところを知り，いろいろな写真やパンフレット類から，自分の担当するものだけを選び出すことができる。
- 報告するところの資料の選別にまちがいないか，友達と協力しながら確認できる。

個人目標

氏 名	性別	目 標
K・T	男	<ul style="list-style-type: none"> 班長としての意識を持ち，友達にも目を配りながら選別の確認作業をすすめることができ，まちがいがあったら指摘できる。
M・K	男	<ul style="list-style-type: none"> 報告するところの写真類をまちがいに選り出すことができ，選別の確認作業を，友達をリードしながらできるだけ早く進めることができる。
M・H	男	<ul style="list-style-type: none"> 報告するところの写真をまちがいに選り出すことができ，選別の確認作業を，友達を手伝いながら進めることができる。
S・C	女	<ul style="list-style-type: none"> 報告するところがどこか発表でき，自分の担当するところの写真

		類を選び出すことができる。
H・R	女	<ul style="list-style-type: none"> 報告するところを指すことができ、友達の助けをうけて、選別の確認作業ができる。
M・N	女	<ul style="list-style-type: none"> 自分勝手な行動をせずに、集中して学習に参加できる。 報告するところがわかり、できるだけ自分の担当するものだけを選び出すことができる。
I・K	女	<ul style="list-style-type: none"> 集中して、選別作業や確認作業ができる。 報告するところがわかり、まちがいをなく写真類を選び出すことができる。

(2) 指導にあたって

生徒たちは、楽しみにしていた修学旅行（宮崎・大分・別府）を無事終えることができた満足感とともに、旅行先でのいろいろな思い出に浸っていると思われる。この旅行先での経験を自分たちのものだけにせず、1年生やお母さんたちに報告してやることは、旅行の印象をさらに強め、思い出すなかで、自分たちの行動をふり返るよい機会である。「報告会」という形式は、生徒たちにも初めての経験で抵抗が大きいと思われるが、できるだけ自分たちの手で準備から報告会までできるようにしたい。

前時では、報告会をしようということを確認したり、どこの班がどこの場所を担当するかを話し合ったりしている。本時では、報告会の資料づくりの一環として写真類の選別を行わせ次のような点に留意して指導にあたりたい。

- 報告するところがどこか確認しやすいように、大きなコース図を掲示しておきたい。
- 報告のための分担はグループを作らせて分担させることにし、そのグループは旅行中の班編成を生かしたい。
- 写真類の選別は、1つの班に1つの場所を担当させる。
- 前時で各班の分担は決めておくが、選別作業がスムーズにいくように本時でも充分確認し自分の報告するところを意識づける。
- 意欲化を図るために、競争的に一斉に写真をとらせ、楽しみながら授業がすすめられるようにしたい。
- 写真は生徒がわかりやすいように、できるだけ大きな写真を使いたい。
- 選別の確認作業の時、各班の班長を中心に協力しながら作業がすすめられるよう助言を与えていきたい。

(3) 準備

- 修学旅行のコース図
- 旅行の写真やパンフレット
- 班名カード
- 文字カード（担当した箇所名）
- 小黒板
- 短冊黒板

※ 資料

- A群……M・K, M・H, K・T
- B群……I・K, M・N, Z・R
- C群……H・R

(4) 実 際

過程 (時間)	学 習 活 動			教 師 の 手 だ て	備 考
	A 群	B 群	C 群		
導入 (7分)	1. 前時までの学習を思い出す。 ・見学地を思い出し発表する。 ・コース図の見学地名を読む。 ・コース図の見学地名のカードと対応させる。 2. 本時の学習について知る。 旅行の写真分けよう ・本時の学習課題を発表する。	・コース図の見学地名を読む。 ・コース図の見学地名のカードと対応させる。	(全)旅行コース図を示し、興味の喚起を図る。 (全)前時までの学習を振り返らせるだけなので、簡単にふれる程度にとどめる。 (全)何のために写真を分けるのかははっきり意識づけるために「報告会へ向けて」ということを確認しておく。 (BC) 2, 3名読ませる程度にとどめる。	・コース図 ・短冊黒板	
展開 (28分)	3. 報告会の資料づくりの分担を確認する。 ・3つの班に分かれて資料をつくりをすることを確認する。 ・自分の班名を呼ばれたら挙手する。 ・自分の班の担当をするところを発表する。 ・自分の担当する箇所の地名カードをもらいながら、自分の担当箇所を確認していく。 4. 旅行の写真類を班ごとに選び出す。 (1) 写真類を黒板に並べる。	・M・Hの助けをかりて自分の班がわかり挙手する。 ・文字カードを読んで自分の担当箇所を指す。	(全)3つの班は、旅行中の班をそのまま生かす。 ぞう班 — M・K, M・N Z・R きりん班 — M・H H・R どらえもん班 — K・T S・C, I・K (全)コース図を利用してはっきりと自分の担当箇所を発表させたり指させたりする。 (C)場合によっては、M・Hに手助けさせる。 (全)その場所の地名カードを身につけさせて、自分の担当箇所を意識づける。 (全)全部がよく見れて判断がしやすいように、写真類は黒板にはりたい。	・班名カード ・文字カード(担当した箇所名) ・コース図 ・旅行の写真やパンフレット	

子 供 の 動 き（見る，聞く，話す，行動，表情など）		
A 群	B 群	C 群
<ul style="list-style-type: none"> ○教師や友達をよく見て話を聞いている。 ○K Tは友達の発表に拍手をする。 ○M Kは緊張して声が小さい。 ○K Tは教師の発問にはっきり答える。 ○M Kは教師をじっと見てはいるが発問には口をわずかに動かしているだけでまだ緊張感がとれていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師や友達の話聞いている。 ○S C，Z R，M Nは見学地の文字カードを絵地図に正確に貼る。 ○みんな楽しそうである。 ○教師の発問にS Cを除いた他の生徒は元気よく答える。 ○M N，Z Rは積極的に挙手をする。 ○S Cはあくびをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○絵地図を見たり床を見たりする。 ○M Hに指示されて高崎山の文字カードを絵地図に貼る。 ○落ちつきがなくきょろきょろする。
<ul style="list-style-type: none"> ○自分の所属する班名を呼ばれたら挙手をし、自分の班の担当するところを発表する。 ○M HはM Nの発表にうれしそうに拍手をする。 ○M KはM Nが所属する班をまちがえて挙手したので制止する。 ○M Kはこの頃から表情がやわらかくなって地名カードを一番先にもらう。 ○教師が持っているM K宛ての封筒（写真がはいっている）をじっと見ている。 ○「エイ，エイ，オー」のかけ声をいってから写真を貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○M Nは所属の班をまちがえる。 ○I Kは教師の発問に積極的に反応したり友達の発表に声援をおくったりする。 ○Z Rはよく聞いていてさかんに挙手をする。M Nに指示したり注意したりする。 ○教師に「高崎山のさる」の写真を提示されてM Nは修学旅行中の経験を思い出してこわがる。 ○S Cは所属する班の担当する箇所をコース図で指すことができて両手を上げて得意のポーズをとる。 ○教師が持っているM K宛ての封筒（写真がはいっている）をじっと見ている。 ○「エイ，エイ，オー」のかけ声をいってから写真を貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師の話聞いている。 ○M Hに促されて挙手をする。 ○班名カードを首にさげてもらいにここにこしている。 ○指名されて自分の担当する箇所を指すことができているここにこしている。 ○教師が持っているM N宛ての封筒（写真がはいっている）をじっと見ている。 ○大きな声で「エイ，エイ，オー」をする。

過程 (時間)	学 習 活 動			教 師 の 手 だ て	備 考
	A 群	B 群	C 群		
<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1; border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; position: relative;"> <div style="position: absolute; top: -20px; left: 50%; transform: translateX(-50%);">↑</div> <div style="position: absolute; bottom: -20px; left: 50%; transform: translateX(-50%);">↓</div> <div style="position: absolute; top: 50%; left: 0; right: 0; transform: translateY(-50%);">展開</div> </div> </div>	<p>(2) 代表の3人くらいで写真類を選ぶ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>・3人の 選び方に まちがい がないか 見る。</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>・1枚ずつ自 分の担当箇 所の写真類を選 ぶ。(S・C I・K)</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>・友達の援 助をもらい ながら、自 分の担当箇 所の写真類 を選ぶ。</p> </div> </div> <p>○ 3人が選んだ写真に間違いがないか 全員で確認する。</p> <p>(3) 自分の担当する箇所の写真類を選び 出す。</p> <p>・選んだ写真類を小黒板にはる。</p> <p>5. 選んだ写真類の確認作業をする。</p> <p>(1) 写真類を1枚ずつ確認をする。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>・他児を リードし ながら確 認してい く。</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>・班長の意見 や指示を聞き 確認作業を一 緒にやってい く。</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>・M・Hの 助けをかり て間違いが あったら抜 き出す。</p> </div> </div> <p>(2) 間違いがあったら、班どうして正し いものと交換する。</p>			<p>①印象づけるために大きな写 真を準備する。</p> <p>②一斉にとらせると気おくれ してしまうことが予想され る3人を選び出し、初めに 1枚ずつとらせる。</p> <p>③間違いがあったら訂正させ 他児にもとり方を意識づけ る。</p> <p>④選んだ写真は各班ごとに小 黒板にはることを知らせる。</p> <p>⑤規制をせずに、一斉に自由 な雰囲気にとらせる。</p> <p>⑥教師が各班に1名ずつつく が、できるだけ班長を中心 に協力しながら作業がすす められるよう助言していき たい。</p> <p>⑦言葉による指示が困難なの で、身振りや動作を交えて 指示をしていきたい。</p> <p>⑧A群の生徒を中心に話し合 わせ、班長の判断で交換を させる。</p>	<p>・小黒板</p>
<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1; border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; position: relative;"> <div style="position: absolute; top: -20px; left: 50%; transform: translateX(-50%);">↑</div> <div style="position: absolute; bottom: -20px; left: 50%; transform: translateX(-50%);">↓</div> <div style="position: absolute; top: 50%; left: 0; right: 0; transform: translateY(-50%);">終末 (5分)</div> </div> </div>	<p>6. 本時の学習のまとめをする。</p> <p>(1) みんなで全部の写真類の確認をする。</p> <p>(2) 報告箇所の確認をする。</p>			<p>①写真類を見て感想を発表さ せる。</p> <p>②写真類の間違いがあったら みんなて訂正していく。</p>	

(5) 評 価

- いろいろな写真やパンフレットから、自分の担当するものだけを選び出すことができたか。
- 友達と協力しながら確認作業ができたか。

子 供 の 動 き (見 る , 聞 く , 話 す , 行 動 , 表 情 な ど)		
A 群	B 群	C 群
<ul style="list-style-type: none"> ○ MHは教師に援助されて担当箇所でない写真を3枚選ぶ。担当箇所のパンフレットをとり黒板に貼る。 ○ MKは担当箇所でない写真を3枚選出す。自分のところの写真を1枚持ってくる。MNに注意する。 ○ KTは担当箇所でない写真を2枚選出す。自分のところの写真を2枚持ってくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ SCとIKは最初に自分たちの担当箇所の写真を選ぶ。SCは写真を見て照れる。 ○ 教師の合図でMNは1番に黒板のところへ行行って写真を選び班の黒板に貼る。のちにはなんでも選んてくれる。 ○ ZRは選んだ写真に何かをうれしそうに話しかけている。あとで1枚の写真をめぐってMNと言い争うが譲歩する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ SC, IKといっしょに前に出て写真を2枚選んで班の黒板に貼る。 ○ MHに援助されながら担当箇所の写真を選ぶ。
<ul style="list-style-type: none"> ○ KTは班の黒板に貼ってある写真の一枚一枚に説明を加えながら確認をしていく。 ○ MKは教師の発問に答えながら確認をしていく。MNが席を離れて歩きはじめたので連れもどす。 ○ MHは班の黒板に貼ってある写真類に説明を加えながら確認をしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ZRはよく見て聞いているが時々ひとりごとをいう。 ○ MNは席を離れて歩きまわりZRにちょっかいをだす。 ○ IKは他の班の写真を見たりよそ見をしたりする。疲れたのか、いすに座り込むが教師の発問には正しく答える。 ○ SCは確認作業では友達のすることをじっと見ている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ゴリラの写真」をとってきて貼るが担当箇所の写真ではない。 ○ 友達の確認作業をにこにこしながら見ている。 ○ 教師の発問にうなずく。
<ul style="list-style-type: none"> ○ MHとMKは教師の発問にはきはきと答える。 ○ KTは教師や友達の説明をにこにこしながら聞いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ IKとSCはよそ見をしたり、あくびをしたりする。 ○ MNとZRはよく聞いている。 ○ SCはおわりのあいさつをはっきりした声でいう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ きょろきょろして教師の説明を聞いていない。

9 考 察

中学部では、本校の「動き」のとらえ方や生徒の実態に立ち「意欲的に学習させるための条件づくりや場の構成」を研究視点として、集団活動の重視と充実が生徒をより意欲的に活動させることになるのではという考えのもとに、学習を展開してきた。ここでは、修学旅行の単位について「生徒どうしのかかわり合い」「班編成」「役割分担」の3つの面から述べていくことにする。

① 生徒どうしのかかわり合い

修学旅行は、隔年毎の単位として設定されており、2・3年生8名で学習が展開された。単元の当初は、いつもの学級集団と比較して発言も少なく活気に乏しかった。原因を考えてみると、大きく2つのことが考えられる。一つは写真や地図、日程表を見ても、実際場面の想定の高難さから旅行の具体的なイメージがわきにくかったこと、二つめは、学級とは違う集団のため違和感があり、集団としてのまとまりに欠けていたこと、以上の二つが考えられる。

生徒たちが活発になり学習への意欲が高まってきたのは、役割や係分担を決めたり、しおり作りという共同の活動の場を設定したりした頃からであった。特にしおり作りでは、書く・切る・張るといった手作業が生徒の活動を動的なものにし、近づいてくる旅行への期待感を持たせた。同時に、基本的にはめいめいのしおり作りでありながら、共通の活動をしていることが生徒どうしのかかわりを深いものにしていった。旅行日程や見学地の話をしたり、友達のしおりを見て参考にしたりして楽しい雰囲気の中で学習が進められ、生徒によっては、「○○さん、次はこれをはるんだよ」という発言も聞かれている。時間を追うごとに「旅行へ行く」という意識のあまりなかった集合体から、はっきりと共通の意識、目的を持った集合体への質的な変化がみられた。

個の問題としてとらえられる意欲も、その高揚の過程を追ってみると、外界とのかかわりが作用している。殊にこの単位では、友達の「○○に行くんだ」という声や共同の活動の場が旅行への意識化につながり、集団意識の高揚と生徒どうしの好ましいかかわりが意欲の面でも効果をもたらしたようだ。

② 班編成

この単位では、旅行中の行動の単位として班を設け、事前、事後学習も班をもとにした活動を盛り込んだ。この班分けについては、生徒が一緒に行動したいという人を挙げてもらいみんなの話し合いをもとに進めていき、班数としては、作業的な学習での活動のしやすさやチームを組んでいる教師の人数から一つの班に2～3名ずつの3班に分けてみた。また、班名もみんなで考え、ぞう班・きりん班・ドラえもん班と名付けた。班分けは、各班にリーダー的な生徒も入り、こちらの意図していたものとほぼ一致していたようだ。生徒にとっても好ましい集団であるために、活動がやりやすかったようである。班員の数は、3名の班はこの単元の活動では適当だったように思う。2名で編成された班では、1名が言葉による指示

理解が困難なために相互のかかわり合いが少ないという印象を受けたが、リーダー的な生徒がもう一人をよく助け、むしろ3名の班よりもうまくいっている場面もあった。班の名前づけも自分たちで動物や漫画の主人公の名前をつけたことが、班意識、班の仲間意識を育てる上で大きな影響を与えたようだ。

班活動がスムーズに行えるためには、リーダーの素質、リーダーと班員との関係、班員どうしの関係等が大きな要因となろう。単元を振り返ると、全体よりも班活動の方が生き生きとし、目標もたてやすく、生徒どうしのかかわりも深かった。ただ、班長はいるものの、まだ真にリーダーシップを発揮するには至らず、教師の指示による活動が多かった。全てを生徒たちだけというのは無理にしても、経験の積み重ねと一人ひとりの手だてを考えていかなければならないことを感じた。

③ 役割分担

単元を通してみると、一人ひとりに与えられた役割はあまりなく、むしろ班に与えられた役割が多い。本時を例にとってみると、報告会の資料づくりや写真をとる時の分担がそれぞれある。個人に与えられた役割としては、旅行中の係分担や班長としての役割が挙げられる。

M・Kの場合、特に班長としての役割を持たせたことは効果的だった。彼は実態でも述べているように、場面緘黙的なところがあり、自分から積極的に友達とかかわろうとしない生徒である。ところが、班長であるが故に友達とのかかわりを持たざるをえない状況になり、他の生徒からも承認されてきた。そのことが自信にもつながり、彼の活動を活発にしていっていった。反面役割を持たされたこと自体の喜びは持っているものの、それを遂行できる力がなかったり意識を持続させることができなかったりした生徒もいた。

役割を持たせたことは、意識化を図り、承認の喜びを味わわせる上では効果があったようである。ただ、本人の能力や性格等を考えて、どういう役割を、どの程度持たせるかということは今後さらに考えていく必要がある。また、その時の教師の援助のしかたも、重要なポイントになってくる。

以上、3つの面から述べてきたが、生徒が意欲的に学習するための集団づくりの条件としていくつか挙げてみると、その集団が生徒にとって安心し安定できる雰囲気을備えていること、その活動に適当な人数であること、リーダーとしてみんなをまとめていく生徒がいること、集団としての活動目標がはっきりしていること、集団の中で個の立場が明確にされていること等が挙げられる。一人では動こうとしない生徒も、集団の中では友達や教師に助けられ認められ活発になっていく。役割分担も班編成も、一人ひとりの活動を促すために効果的であったといえる。しかし、生徒どうしのかかわり合いという面からみれば、どうしても能力の高い子から低い子への働きかけのみで終わるきらいがある。低い子がより主体的になるための手だてを考えていくことが、今後の大きな課題であろう。また、集団とその中で個の生かし方について、さらに研究を深めていかなければならない。

Ⅳ ま と め

小学部では、身辺生活の自立が主要な課題であり、高等部では、卒業と同時に就職していけるようにする社会自立をめざすことが大切である。中学部では、これらのことをもとに、集団の生活になじめる生徒を育成することが重要であると考えた。一方、発達の特性の面から、中学部の生徒は、個と集団とのかかわりの中で生活し、仲間意識が芽ばえる段階であると考えた。また、本校中学部の生徒は、集団参加はできても消極的でしかも自己中心の行動が多く、共同的な活動が深まらない実態であった。

以上のようなことから、集団生活を通して、人間関係の改善、深まり、拡大がみられ、より生き生きと活動するであろうと考え、「集団の中における人と人とのかかわりを深める指導」を研究の視点として、二年間、研究をしてきた。

一人では動こうとしなかった生徒が、集団の中では、友だちの様子を見たり、友だちの動きにつれて動いたりする活動から、友だちや教師の援助を受けたり、激励、承認、賞賛されたりしながら、同じ活動を一緒にしたり、役割を分担したりして、共通の課題に向かって活動するように変容してきたようである。

二年間の研究から、生徒の活動を生き生きとさせる条件の基本は、生徒どうしのかかわり合い、生徒と教師のかかわり合いであることや、人間の発達を促進していくための原動力となるものは集団であるということ、即ち、「人は人によってのみ人となり得る」ということが明らかにできた。

わたしたちは、生徒が心理的に安定し、安心して自己表現ができるような暖かい人間関係にしていこうことや、生徒の興味や関心に基づき、協力し、助け合って学習させるよう計画を立て指導を展開しなければならない。

本学部の研究は、やっと軌道に乗った感じである。今までの研究の成果をふまえ、今後は、一人ひとりの生徒を意欲的に活動させるために、教具や学習内容面からの研究と並行しながら集団の中での個の生かし方や伸ばし方、能力の低い生徒からのかかわりかたや集団の効用性等について、更に研究、実践を深めていきたい。